

## 『枕草子』「故殿の御ために」章段の〈対話〉と機能

中田幸司

### 要約

『枕草子』の〈対話〉に贈答歌の機能を応用する。〈対話〉と地の文との関わりから表現の理解をより深化させる。また、顕在化した表現の背景に潜在化した表現を読み取ることや、問テキスト性を生かして既存の和歌をふまえるとき、より重層性のある読みができる。また、顕在化した表現の背景に潜在化した表現を読み取ることや、問テキスト性を生かして既存の和歌をふまえるとき、より重層性のある読みができる。

キーワード：枕草子、斉信、〈対話〉、贈答歌、問テキスト性

### 一、はじめに

平成の終わりを迎える現在、『枕草子』の研究が活性化しつつある。たとえば、諸本に関する研究に注目してみれば、山中悠希は塚本を再検討し、これまで類纂系統として前田家本と横並びであった塚本の見方を改め「再構成本」と提案した<sup>1)</sup>。また、島内裕子は能因本を底本とした文庫を刊行した<sup>2)</sup>。ただし、これらのことは必ずしも、これまで『枕草子』研究の中心であった三卷本系統を否定するのではなく、いずれも偏向することなく用いていくことを再認識させるきっかけとなるものであろう。

このような諸本の研究の一方で、そこに記された表現の分析も研究テーマとしては欠かせない。筆者はこれまでも表現の分析を中心に論じてきた<sup>3)</sup>。本稿では『枕草子』にみる〈対話〉とその機能に注

目して考察する。たとえば、『源氏物語』に関して「対話」を論じたひとりに鈴木日出男がいる。鈴木は、従来の『源氏物語』などの研究では、「心内語と地の文に対する注目度に比べると、作中人物が直接に発する会話に関しては、さほど重要視されてこなかったように思われる」との認識から「対話」に着目し、「その変形である贈答歌」を「物語の人間関係の一単位として二人の関係を直接につながりとめていく」という「物語の重要な方法の一つ」とした<sup>4)</sup>。ここに鈴木の対話の変形として贈答歌をとらえることは、改めて『枕草子』における〈対話〉の問題を想起させてくれる。それは、贈答歌を対話の変形とみる鈴木の指摘を反転させ、対話に贈答歌の観点を重ねてみる、いわば「贈答歌的〈対話〉」の視座である。このことにより広く〈対話〉を分析しなおすことが可能となろう。

筆者はここに「贈答歌的〈対話〉」に注目をするが、贈答歌とは、

今日、

二人の人の間でやりとりされる和歌。贈られた歌（贈歌）と返された歌（返歌）との二首で完結するのが基本だが、他にもさまざまなパターンがある。返歌を受け取った人がさらなる返歌を返して、何首ものやりとりが続く場合もあれば、逆に贈歌に対して返歌が返されない場合も、返歌が期待されていた以上は贈答歌に分類される。独詠歌に返歌が付されたら、結果的には贈答歌となる。恋人・夫婦、親子、兄弟姉妹、友人、主従など、さまざまな人間関係において贈答歌は交された。男性からの求愛の贈歌に対しては、女性は返歌で相手の言い分をはぐらかしたりやりこめたりするのが通常。贈答歌は上代から見られるが、物語、日記、私家集など平安文学においては、その作品形成において、きわめて大きな比重をもつ。ただし贈答歌の多くは晴の歌の対極ともいえるべき私的なやりとりであるから、詠作事情が詳しく知られない場合が多く、特に私家集では解釈が困難な贈答歌が少なくない。勅撰集では『後撰集』に約一八〇組の贈答歌が見出されるのが最多で、その流行ぶりを反映しているが、社交的な和歌から創作詩としての題詠歌へと、和歌文学に新たな動向が生じることもあって、贈答歌は王朝風俗のなごりとして命脈を保った。<sup>5)</sup>

とあり、後述する斉信と清少納言とのやりとりとその根本的な様式は異なるが内実は合致する。一方、従来、対話とは、

直接に向かい合って互いに話をする。また、その話。多くは二人の場合にいう。対談。

と理解され、<sup>6)</sup>これらは虚実にかかわらず生じる。もちろん、『枕草子』は虚構性の有無でいえば、作り物語といった創作された世界観を中心にもつものではない。しかし、「読者を意識した仕掛け」は随所にあり、<sup>7)</sup>事実として扱うことも書き手のバイアスを通る限り、慎重かつ作り物語とも区別する必要が出てこよう。そのため物語に示された「対話」や日常に起こりうる対話とは一線を画すために便宜上へを付しておく。

また、一つひとつの章段は、従来、類聚的・日記的・随想的といった枠組をあてはめることがなされ、『枕草子』を理解する上では有効な分類であった。しかし、その分類にも限界があり、章段内部の機能的なつながりを丁寧に読み取っていく必要があると考える。そのため、定子と清少納言との〈対話〉から斉信と清少納言の〈対話〉への関連性も検討する。以下、贈答歌的〈対話〉の観点から「故殿の御ために」章段をみていく。<sup>8)</sup>

## 二、典型的な「後期章段」——研究史からみる当該章段——

まずは次に本文をあげる。また便宜上【Ⅰ】～【Ⅲ】、A～Eに区分して示すこととする。<sup>9)</sup>

【Ⅰ】故殿の御ために、月ごとの十日、経仏など供養せさせたまひ

しを、九月十日、職<sup>しき</sup>の御曹司<sup>みざうし</sup>にてせさせたまふ。上達部<sup>かんだちめ</sup>、殿上人、いとおほかり。清範<sup>せいはん</sup>講師<sup>こうじ</sup>にて、説くことはた、いとかなしければ、ことにものあはれ深かるまじき、若き人々、みな泣くめり。

【II】果てて、酒飲み、詩誦<sup>しず</sup>などするに、頭中将<sup>ただのぶ</sup>齊信<sup>さいのぶ</sup>の君の、「月秋と期して身いづくか」といふことをうち出だしたまへり。詩はたいみじうめでたし。いかでさは思ひ出でたまひけむ。おはします所に分けまゐるほどに、立ち出でさせたまひて、「めでたしな。いみじう、今日の料に言ひたりけることにこそあれ」とのたまはすれば、「それ啓しにとて、物見さしてまゐりはべりつるなり。なほいとめでたくこそおほえはべりつれ」と啓すれば、「まいてさおほゆるむかし」と仰せらる。

【III】わざと呼びも出で、会ふ所ごとにては、A「なかまろを、まことに近く語らひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおほゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに、明け暮れなき折もあらば、何事をか思ひ出でにせむ」とのたまへば、B「さらなり。かたかるべきことにもあらぬを、さもあらむ後には、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにも、やくとあづかりてほめきこゆるに、いかでか、ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、いひにくくなりはべりなむ」と言へば、C「などで。さる人をしもこそ、妻<sup>め</sup>よりほかに、ほむるたぐひあれ」とのたまへば、D「それ方にくからずおほえはこそあらめ、男も女も、け近き人思ひ、方

ひき、ほめ、人のいささかあしきことなど言へば、腹立ちなどするがわびしうおほゆるなり」と言へば、E「たのもしげなのことや」とのたまふも、いとをかし。

(二二九「故殿の御ために、月ごとの十日」二四二〜二四四頁)

この章段は、右にみる書き出しからもいわゆる日記的章段に属することがわかる。今日では赤間恵都子や田畑千恵子によって日記的章段を関白道隆の盛時や定子生存期等を軸にして分類し叙述の特徴が指摘されている。その観点に沿えば、道隆没後、定子存命の後期章段であることがわかる。田畑は、

枕草子の章段中、一般に日記的章段という名称で類別される章段群があるが、その内部には、厳密に比較するならば、各章段が独自のスタイルをもつと言えるような、多様性が存在する。一括した名称を冠することで章段の性格を規定することには、限界を認めざるを得ない。

と示すように、日記的章段として括ることに限界を認めている一方で、それでも前期・後期章段に分別し共通する特徴を見出そうとした。なお、ここにいう「多様性」とは章段ごとの特徴を示すものであるが、この「多様性」をつぶさに検討することも必要であろう。

そこで本章段が後期章段として位置づけられていることを確認するために、田畑が前期章段の特徴として示した、

①素材に依存し②内在する「をかしさ」を具体的な場面として提示

すること、③讚美の主題を形成する。

という要点をふまえて、ここに対照的に後期章段の特徴を示してみると、

i 素材に依存することからずれ、ii 「をかしさ」を内在させずに顕在化し、iii 讚美以外の主題を形成している。

といえよう。

このとき、「故殿の御ために」章段の筆致は、故殿の供養から起筆されながらもこの素材に関しては簡素に示されており【Ⅰ】、むしろ供養の後の酒宴・朗詠の場【Ⅱ】や、斉信から清少納言への口説きの場【Ⅲ】に重点が置かれているため、素材からずれていることは明らかである。

また【Ⅰ】は「日記的章段中、唯一の悲しみの涙。但し、直接的に故人を哀悼するものではない」といわれ、<sup>(1)</sup>「かなし」に集約される。

【Ⅱ】は「めでたし」に集約される中で【Ⅲ】は「いとをかし」と明示されている。ここに讚美の主題に関しては定子への讚美を読み取る指摘もあるが、<sup>(2)</sup>【Ⅱ】は朗詠に対する「めでたし」であり、定子もわずかに登場するばかりで、章段内に広く定子との関わりが描かれているのではない。このため、定子への讚美と判断するには慎重ならざるをえない。

このような構成をもつ当該章段は後期章段の典型にあるといえよう。以下、具体的な表現を検討していく。

### 三、〈対話〉にみる賞賛と補完

すでに指摘があるが、「月秋と期して身いづくか」は平安中期の漢詩集『本朝文粹』巻十四や『和漢朗詠集』懐旧に典拠をもつ。<sup>(3)</sup>そのことよってこの朗詠の一節はどのように受け止められたのだろうか。このことは直後の定子と清少納言の〈対話〉から読み取ることができる。定子は「めでたしな。いみじう、今日料に言ひたりけることにこそあれ」(能因本系統は「いみじう、今日のこと言ひたることにこそあれ」と「今日」と限定したいいぶりから九月十日の時宜を得た朗詠だと褒めた。一方、清少納言も「それ啓しにとて、物見さしてまゐりはべりつるなり。なほいとめでたくこそおぼえはべりつれ」と褒めていち早く定子に伝えたかったのは、やはり折にかなった朗詠であったためであろう。

ただし、この〈対話〉には問題が残る。たとえばこの〈対話〉からは何に関するやりとりであるのか、が明確には示されていない。無論、読者は書き出しから読み始めていけば斉信の朗詠ぶりに対することだと理解はできる。しかし、それを決定づけることは定子の言葉からは「今日の料(今日のこと)」に言ひたりけること」の部分<sup>(4)</sup>が該当する程度であり、清少納言の言葉からは「それ啓しにとて」の「それ」といった代名詞が受けることに限られる。つまり、前後の展開を示す地の文に詳細な情報があり、そこに依存される〈対話〉はあくまでも斉信の朗詠を受けた上での補足的な、〈自立性のない対話〉であるといえる。この〈自立性のない対話〉は、ここでは定子と清少納言のいわずとも通じる関係に生じた〈対話〉であり、当

事者間に共通する体験、共有された事柄が内在している結果である。また、表面化した定子の言辞「めでたしな」を清少納言が「いとめでたくこそおぼえはべりつれ」と反復して同意したため、お互いの共通した叙情に焦点化される〈対話〉を生む筆致といえる。

ちなみに、この〈対話〉のきつかけとなった斉信の朗詠に関する叙述にも疑問が残る。たとえば、斉信の発言として「月秋と期して身いづくか」とのみ書かれている。この場での発言はこの記された部分だけを朗詠したのかということである。すでに、萩谷朴が指摘するように、その朗詠の範囲はさらにその前半部である「嗟吁、人命定まらず、吾が生知り難し」、「花は春ごとくに匂へども主は帰らず」に及んでいた可能性を考慮すべきであろう<sup>(14)</sup>。なぜなら、この場において何よりも表明すべきことは主である道隆が存在しないことに加え、遺された者の思いを代弁するためである。それを表明しないと考えるにくい。すでに書き出しに「故殿の御ために、月ごとの十日、経仏など供養せさせたまひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせたまふ」と道隆の不在を示した上で、時宜に合うことに焦点を当てたためにこの朗詠の前半部は省略されたと考えられる。また、この朗詠は『和漢朗詠集』にも採られ、定子周辺には広く知られていたことが推測されることや、史実に則っていえば斉信の父の一周忌法要や異母弟左中将道信など血縁者の法要がきっかけとなったことなどが指摘されてきた<sup>(15)</sup>。たしかに、この「月秋」の一節だけでも周囲は場に即した斉信の主張を理解できたであろう。また、定子にとってもこの「月秋」が殊に共感し響いたと推測できる。しかし、往時の読者をはじめ、当該章段を一テキストとして読む者にとっては、

漢籍の典拠を把握していることによってもちろん、より理解の深まりはあるが、次の『古今和歌集』の和歌を想起することでさらに深く受容できるのではないだろうか<sup>(16)</sup>。

五条后宮の西の対に住みける人に、本意にはあらでもの言ひわたりけるを、睦月の十日あまりになむ、ほかへ隠れにける。あり所は聞きけれど、えものも言はで、またの年の春、梅の花盛り、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひて、かの西の対に行きて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてい

(恋歌五・七四七・在原業平朝臣)

周知のように『伊勢物語』第四段にもあるこの和歌は、「月はあの時のままの月ではないのか。春は昔のままの春ではないのか。私ひとりだけが元のままの身であって……」と理解される<sup>(17)</sup>。当該歌が漢籍に典拠をもつことも指摘されるが、中でも人生の最高の輝きの時を春とみて、遙かに遠くなった時を懐旧する「惜春」がこの和歌にも反映されている点に注目したい<sup>(18)</sup>。既述したように、斉信の朗詠には「花は春ごとくに匂へども主は帰らず」と春の花の盛りの循環を述べつつ、主の不在を嘆く。このことは主人の不在である春もまた間接的に嘆く時となりうるのであろう。その上、当該歌の「月やあらぬ」は斉信の朗詠として書き手に叙述された「月秋と期して身いづくか」に対応していると考えてよいだろう。

これらのことから、「月やあらぬ」歌は斉信の朗詠の場面を理解

する上で有効な知識といえる。

#### 四、「いとをかし」を誘発した和歌

こうした定子と清少納言の〈対話〉の最後には「まいて、さおほゆらむかし」（まして、そう思っているのでしょうね）とあり、清少納言が斉信を褒めることに對して、二人の関わりの深さを予測させる一言が付け加わっている。ここに関根直直は「之を誦し出でし人の齊信なれば、好意をもてる清少は、況してめでたく思ふらんとなり」とし、田中重太郎はこの定子の一言の後に「中宮のこの御ことばの意味は」という内容の接続詞が省略されているとする。

この定子の言葉の意味と後文の斉信と清少納言の〈対話〉に関連性をみる上では重要な指摘であり、この補充関係を担うのが斉信と清少納言の〈対話〉である。さて、二人の〈対話〉は「わざと呼びも出で、会ふ所ごとにては」に続いて、

A 「なかまろを、まことにちかくかたらひ給はぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらず、と知りたるを、いとあやしくなむおほゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに、明け暮れなき折もあらば、何事をか思ひいでにせむ」

とはじまる。ここでの斉信と清少納言の関わりはどのように理解できるのだろうか。

まず、斉信はわざわざ呼び出しもし、また出会うたびに「なかまろを」と伝えていたことがわかる。ただし、丁寧に読むと、これは斉信の言葉をそのまま書き手が再現したのではなく、書き手はその内容を再現している。というのは、「わざと呼びも出で、会ふ所ごとにては」から、一度だけのことではなく、幾度か同じようなやりとりがあったことが読み取れるからである。

度重なることから斉信の清少納言に対する強い思いを読み取ることもできる。しかし、このような懸想をすることは斉信の清少納言へのひとつの接し方として理解することが穏当ではないか。いわば口説きの挨拶である。なぜなら、このような懸想の〈対話〉はすでに繰り返されており定番化しているためである。それも、清少納言が拒絶しつづけることによるもので、予定調和を生むのである。後述するが、何よりも拒絶の姿勢に悲壮感や緊張感がなく、総じて「をかし」に収束していくのである。

このことは、贈答歌によって思いのたけを述べる男に對して、女が「相手の言い分をはぐらかし」て拒絶する手法に通じる。ただし、何度も繰り返された〈対話〉であればあるほど思いの新鮮味は失われ、かえって二人の関係は熟練味が増した挨拶と理解したい。

これは〈対話〉の内実からもわかる。斉信は清少納言が「にくしと思ひたるにあらず知りたる」と述べ、清少納言にも好意のあることを代弁してみせる。いわば、懸想の思いが清少納言にもあるだろうと誘い水を向けるのである。さらに、「かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし」と長い付き合いによって築かれた関係性を伝え、「殿上などに、明け暮れなき折もあらば、何事をか

思ひ出でにせむ」と思い出のよすがにしたい旨まで切り出すのである。

このようなことを述べる齊信は、直前の朗詠を披露し、定子や清少納言から賞賛を受けていた人物とは異なる一面ではあるが、定子の言辭「まいてさおほゆるむかし。」を補完するということにどのような意味があるのかを考えるべきである。おそらく、その補完には、齊信と清少納言の二人がどのような関わりがあったのか、その真実を示す意味があったのだろう。その上で、読み手に対して種明かしをすると同時に、何かしら齊信に関する新たな気づきを与える叙述を示そうとしたのではないだろうか。その結果、状況を詳細に記され（自立性のある対話）となっていく。

さて、このときの清少納言は拒絶の仕方はどうであったか。

ここには切迫した感情は読み取れない。むしろ、実は「さらなり。かたかるべきことにもあらぬを」と最初に返すところをみる限り、ここに齊信への拒絶はなく、親しくなることは難しくはないといってみせる。その上で、だが、「そうなた後は……」と不都合が生じることを示し、反転するのである。ここには皮肉を述べて断つたり、不安を述べて拒否したりするような直接的な手法ではなく、巧みな老獪ささえ読み取れる。そして、不都合が生じるとして、今後褒めることができなくなるといっているのである。

無論、相手の恋心を受け入れて深い関係になったとしても、褒めることができなくなるとは考えにくい。しかし、主上の前でさえ褒められなくなると、あたかも切り札のような場を想定してみせた上、「心の鬼」によって拒絶してみせる。これらの展開と筆致には清少

納言の返答の趣向と書き手としての熟練さが読み取れる。これに続き、

C 「などで。さる人をしもこそ、妻よりほかに、ほむるたぐひあれ」  
D 「それがにくからずおほえばこそあらめ、男も女も、け近き人思ひ、方ひき、ほめ、人のいささかあしきことなど言へば、腹立ちなどするがわびしうおほゆるなり」

と、褒めることを軸として（対話）が繰り返される。ここでは、齊信の「などで」に象徴されるように、清少納言の言い分に納得がないなか、清少納言は「それがにくからずおほえばこそあらめ」と反論を示すのである。

この返答については、北村季吟が『春曙抄』に「夫婦なる人をほむるがにくきゆへ、我は遠慮ありと也」というように、仲睦まじい関係として夫婦になってしまつては相手を褒められないことを理由に拒否するのである。ここでも、即座に拒否するのではなく、相手の言い分を一度は受け止めた上で反論する展開をする。その結果、齊信は、

E 「たのもしげなのことや」

と返す。この、最後の一言は、金子元臣が、

「頼もしげなの事や」と応酬はしたものの、弾力を失った鞠の

やうな具合で、甚だ振はない。蓋し申込を拒絶された失望の声である。

というように失望感を読み取る説があるが、これらの〈対話〉を総評するように述べられたのが「いとをかし」であるとき、単なる失望感で済ませてよいのだろうか。あるいは「清少は行成と意気投合したる交なりしかば、斉信には従はざれしならむ」という藤原行成との関係が深かったことを根拠にする説もある<sup>(23)</sup>。だが、それも「いとをかし」とすると、不自然ではないだろうか。

改めていうまでもないが、「いとをかし」と評されたきっかけは、直前の斉信による「たのもしげなのことや」への評価である。無論、この一語に対して向けられたというよりは、さらにその直前の「それがにくからずおほえはこそあらめ、男も女も、け近き人思ひ、方ひき、ほめ、人のいささかあしきことなどいへば、腹立ちなどするがわびしうおほゆるなり」への返答として示されたことへの評価である。書き手となった段階で示された評価から何を読み取るべきであるか。ここには、

あひみんと思ふ心をのちにいてける我身のたのもしげなき

〔貫之集〕五七二

さ、かにのいかにせよとかわかこひのたのもしげなきぞらに  
しもふる

〔元実集〕二九一

というような、男女の深い関わりをもつことに執着した我が身を卑

下したり、恋心をいだくことに頼りなさを覚えたりすることを詠んだ和歌の世界を彷彿とさせたことによつたのではないだろうか<sup>(24)</sup>。このとき、前半の〈対話〉からは、漢籍に長けた斉信への定子と清少納言らの賞賛のやりとりを、後半の〈対話〉からは定子の言葉も補完する機能の中に、斉信の口説きの挨拶をきっかけにして和歌にも精通しあつた二人の風流なやりとりを、それぞれ読み取るべきではないだろうか。

## 五、おわりに

ここまで典型的な後期章段の中に〈対話〉を軸に章段の表現の分析を行つてきた。『枕草子』の〈対話〉を贈答歌の変形、いうなれば贈答歌的〈対話〉と考えられるならば、そのやりとりと地の文との関わりは表現の理解をより深化させると考えられる。特に、斉信の朗詠として顕在化した「月」の一節には、その背景に潜在化している「春」の一節があることは、故殿の最盛期と没後を相対化させる上で見逃せないところである。また、これらの受容に関して、『枕草子』以前の既存の和歌を具体的に示して、さらなる理解の深まりのきっかけとなることを示してきた。「当時の才人と男女の機微にふれる言葉のやりとりのおもしろさ」のどこにどのような機微があり、おもしろさがあるかを明確にしたことにもなる<sup>(25)</sup>。

『枕草子』には和歌や和歌表現としての歌ことばが点在しており、これらのいわゆる間テクスト性を生かすことで、より重層性のある読みが可能となってくる。他章段の〈対話〉は今後の課題としたい。



## 注

- (1) 山中悠希『堺本枕草子の研究』(武蔵野書院、二〇一六年二月)
- (2) 清少納言 島内裕子校注・訳『枕草子』上・下(ちくま学芸文庫、二〇一七年四月)
- (3) 拙著『平安宮廷文学と歌謡』(笠間書院、二〇一二年十二月)
- (4) 鈴木日出男『源氏物語』の対話と贈答歌』『文学』第十卷・第四号(岩波書店、二〇〇九年七月)
- (5) 『和歌文学大事典』「贈答歌」の項(徳原茂実担当)(古典ライブラリー、二〇一四年)
- (6) 『日本国語大事典』第二版第八卷「対話」の項(小学館、二〇〇二年。初版は一九七二年)
- (7) 注(3)前掲書第二十二章「枕草子」殿などのおはしまさで後」章段致し叙述にみる読者への仕掛け。
- (8) ささまざまな観点から「対話」をとらえて『枕草子』との関連を論じた主なものに、上野志保子 川島和佳子『枕草子』日記章段における対話の類型』東横国文学二二、(一九九〇年三月)、橋本治・三田村雅子「特集」枕草子―表現の磁場 対話する枕草子・挑発する枕草子―桃尻語訳など』国文学四一一、『国文学』(一九九六年一月)、藤本宗利「枕草子の新しい読み2」『対話』としての異本―枕草子は一つではない』『月間国語教育』十七―二、(一九九七年五月) などがある。
- (9) 『枕草子』は三卷本系統第一類本陽明文庫蔵本を底本とする松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集一八、小学館、一九九七年)による。ただし、必要に応じて表記を私に改めるとともに、杉山重行編著『三卷本枕草子本文集成』(笠間書院、一九九九年)ならびに他系統本を参照しこれを示す。
- (10) 田畑千恵子『枕草子日記的章段の方法―中関白家盛時の記事をもぐって―』『中古文学』第三六号(一九八六年三月)、田畑は、前期章段の方法は、一般化して言えば、限定的な素材(盛儀の様・
- 主人の人人の卓越性等)に依存し、それに内在する「めでたさ」「をかしさ」を具体的な場面として提示することで、讚美の主題を形成するところにある。これに対して、その枠を踏み出したところにより広がりをもって―異なった新たな素材との関わりの中で―試行錯誤を重ねながら、新たな讚美の方法をあみ出していくのが、後期章段のあり方と言えるだろう。
- とする。
- (11) 津島知明・中島和歌子編『新編枕草子』(おうふう、二〇一〇年)一六一頁脚注7
- (12) 浜口俊裕「故殿のために」『枕草子大事典』(勉誠出版、二〇〇一年)には、「諸注が頭中将斉信その人の才能の豊かさを全面に押し出して賞賛した章段とも、理想的な男性斉信との親交を自賛的に語った章段とも見ているのは、いかがであろうか」と疑問を呈し、「上達部殿上人いとおほかり」と多数列席することをあえて示すことを根拠に「今もなお信任篤く中宮定子の権勢が維持継続されている時空を描くことに狙いがあると思われる」とし「本章段の主題は、斉信の賞賛にあるのではなく、中宮定子の賛美讃仰にあると理解すべきであろう」とする。公卿らの参席から間接的に読み取ろうとする姿勢は魅力的な手法ではあるが、そのことのみで讚美に収束する章段とは断定しにくい。
- (13) 『本朝文粹』卷十四、雑、懐旧の天祿二(九七二)年四月二九日、菅三品(菅原文時)による「為謙徳公報恩修善願文」(謙徳公・藤原伊尹への追善の願文)の該当部分は以下の通り。  
嗟吁、人命定まらず、吾が生知り難し。彼の金谷に花に酔ひしの地は、花は春ごとに匂へども主は帰らず。南楼は月を遊ぶの人、月秋と期して身いづくにか去る。(原漢文)
- (14) 萩谷朴『枕草子解環』三(同朋舎出版、一九八二年)二二四頁。
- (15) 注(12) 浜口俊裕に同じ。
- (16) 和歌ならびに歌番号は『新編国歌大観CD-ROM版Ver. 2』(角川書店、二〇〇三年)により一部私に改めた。

- (17) 早稲田久喜の会編『学びを深めるヒントシリーズ伊勢物語』第四段・中島輝賢担当(明治書院・二〇一八年三月)。
- (18) 「月やあらぬ」歌が『白氏文集』に同様の発想のあることは金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』句題和歌・千載佳句研究篇(藝林舎、一九七七年。初版は培風館、一九四三年)をはじめ片桐洋一「伊勢物語の本質と背景」『伊勢物語の新研究』(明治書院、一九八七年)・渡辺秀夫「『伊勢物語』における漢詩文受容」『平安朝文学と漢文世界』(勉誠社)らによつて指摘されている。中でも片桐は「惜春」が『伊勢物語』の本質であるという。
- (19) 関根正直『補訂 枕草子集註』(思文閣出版、一九七七年。初版は六合館、一九三二年)三九五頁。
- (20) 田中重太郎『枕草子全注釈』三(角川書店、一九七八年)一三七頁。
- (21) 北村季吟『枕草子春曙抄 下』北村季吟古註釈集成(新典社、一九七七年。初版は延宝二(一六七四)年以後)二四頁頭注、ただし、能因本系統を底本とするため「それがにくからずこそあらめ」注記である。
- (22) 金子元臣『枕草子評釈』下(明治書院、一九二四年)六五八頁。
- (23) 注(19) 関根前掲書、三九七頁。
- (24) 和歌は『新編私家集大成CD-ROM版』(エムワイ企画、二〇〇八年)により、表記は一部私に改めた。
- (25) 注(8) 前掲書二四四頁頭注。なお、これらの〈対話〉への探究は今日、コミュニケーション能力の向上を求められる国語教育の現場においても、応用できる観点である。ひとつのテキストを理解する上で、表面化している文字以外のいわゆる「行間を読む」ことにも通じるし、対人との対話を行う上で、その背景に存在する事物を理解しているか否かがスムーズな対話を生むという指導にも通じるであろう。あるいは、他のテキストとの類似性や共通性をもとに、比較検討することや、位相差や相違性を見出すことで、多角的なアプローチの仕方を生み出しやすくなる。「当時の才人と男女の機微にふれる言葉のやりとりのおもしろさ」のどこに機微があり、ど

こにおもしろさがあるのかを探究することこそ文学研究と国語教育の橋渡しとなる観点であろう。

(なかだ こうじ)

A consideration regarding the literary ‘function’ of the dialogue  
from the chapter, “After the Late Regent’s Death.”  
in *Makura no soshi*.

Koji NAKADA

Abstract

This paper discusses the application of the known function which is significant to the “romantic poetry exchange,” to the “conversational dialogue” found in *Makura no soshi*. Application of this previously known concept or function will explore the existing dialogue and the foundational context, thus bringing further depth to the understanding of the literary expressions. Reaching into the potential meaning behind the actual expressions through this application, as well as the exploration using the intertextual associations with other Waka pieces would bring the reading of *Makura no soshi* to a much deeper, more complex and richer level of experience.

Keywords: 11th century Japanese Literature, Makura no soshi, Tadanobu, Romantic Poetry, Dialogue, Conversation, Literary Function, Intertextuality,